
厨二病大戦

キョン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

厨二病大戦

【Nコード】

N1847W

【作者名】

キヨ

【あらすじ】

この世界とは違う世界がある。
そこには生物がない。
しかしそこにはすべてがある。
そこにいくには、厨二病になること!?

始まりは俺の心配（前書き）

不定期です。

期待しないで待っててください。

始まりは俺の心配

君たちには親友と呼べる友達がいるだろうか？

俺こと御堂勇樹^{みどうゆうき}にはいる。名前は栗橋^{くりはし}亘^{わたる}というのだが、このさいどうでもいい。幼稚園からの付き合いで、小学校、中学校と同じ学校。高校も同じとこに合格し、めでたく俺らは高校一年だ。

こいつはゲームと某ジャ○プが好きなだけで至って普通のやつなのだが、最近おかしい。何か違和感がある。杉田○和が柿○徹也のモノマネをしたときぐらい違和感がある。わかりにくいが許せ。なので最近の会話を聞いて欲しい。

「俺さあ。この前まで使ってた。5年前のニン○ンドーDSがついに壊れたから新しく3D○買ったんだよなー。」

「なんだよ。俺に貸せば俺のクレイジー・ダイ○モンドで直したのに。」

「ワタルいつからスタ○ド使いなんだよw」

これじゃあわかりにくいだろうから、もう一つ聞いてくれ。

「この前ゲーセン行ってプレイ○ルーやってたら乱入されてさあ。相手が数人の不良だったんだよ。俺小心者だからあえて負けたんだけど、勝ったらヤバかったなあ〜」

「俺がいたらそのグループ倒したのにww」

わかっていただけただろうか？そう俺の親友は最近厨二病なのだ。高校にもなつて中二て……。

厨二病とは、思春期の少女少女にありがちな自意識過剰やコンプレックスから発する一部の言動傾向を小児病とからめ揶揄した俗語である。（以下ウィ○ペディア参照）だ。いわば痛い子だ。

さて、何故そんな609字によって言った前置きをしたというのだな。

……学校が終わってあいつの後を追っている。親友といっても家が近いわけでもなく高校への通学路は全くの反対方向だ。

あいつがなぜあんな痛い子になってしまったのか探るべく、こんな犯罪まが・・・探偵ごっこをしているのだ。

断じてストーカーではない！

尾行して10分。あいつが帰宅路からはずれた。ゲーセンやゲームショップはない通りにスツと入っていった。何をあんな何もない路地に入って一体なにがしたいんだ？

だいたいオチは読めるだろうが言う。案の定いない。ワタルが曲がった路地を見てもいない。警察署に行方不明届を出してもいいのだが、こんなラノベ展開でそんな野暮なことはしてはいけない。

明日にでも学校で聞くか・・・。。。。。

「ワタル！一つ話があるんだがいいか？」

「なんだ？告白か？やめろよ、俺にそんな趣味ないぞ。」

「ちげえよ！勝手な想像すんな！つてそうじゃなくてだな。実は俺、昨日お前の後を追ってたんだ。」

「え？ちよつとなに？陰からヒーロー見守るヒロインですか？ほんとそんな趣味ねえからやめて？」

「それ好きなお前！？いつまで引きずんだよ！つてまた話がそれた。話進めるぞ。そしたら路地に入った瞬間ワタルが消えたんだよ。あれなんだよ？」

さっきまでワタルのへらへらしてた目つきが急に鋭くなった。

「・・・話ができるが、今から英単語テストをしていいか？」

「いいけど、俺英語できないぞ？英語で高校留年かもしれないから。」

「onslaught」

「猛攻撃」

「corpse」

「死体」

「disaster」

「災禍」

数秒の沈黙の後、ワタルが口を開いた。

「おし。今日、帰り俺と付き合え。」

「え？告白？」

俺はそのままかえしてやった。

放課後はひさびさのワタルと二人で帰ることとなった。

「しかし、ワタルと帰るのは小学校以来かぁ。中学は俺、部活してたからなぁ。」

「部活ってお前は映画研究部じゃねえか！俺より映画を取りやがって。」

「いい趣味してるだろ？」

「悪い趣味じゃないな。」

そんな会話をしてる間に昨日ワタルが消えたポイントについた。

「ワタルさぁ、昨日ここで何をしてたんだ？」

「今見てろって。」

ワタルが何もない空間に手を出し、呪文のようなものを詠唱し始めた。

「我は探究者であり、すべての次元を欲するものなり。開け、異空間の門」
フォラス
ル・ゲート

こいつは本当に精神科にでも連れてったほうがいいな。いや厨二病は治らないだろうなぁ。ラ○チ先生でも無理だもん。あの強キヤラが無理なら誰でも無理だよ。

そう思った刹那、目の前の空間に黒い亀裂が入った。

「ほら行くぞ。」

「ちよいちよいちよい！」

何も言えず、俺は闇の中に消えた。

目を開け、そこに映った空間は何も変わっちゃいなかった。

しかし何かがおかしい。そして俺は気づいた。

「ここ、俺ら以外に誰もいねえ！？」

ワタルは不敵に笑った。

始まりは俺の心配（後書き）

俺はこっちのほうに性が合うと思います。

親友の説明と俺のザコ狩り（前書き）

俺の執筆魂に火が付きました。

親友の説明と俺のザコ狩り

不敵に笑っているワタルは独り言のような小さな声でつぶやいた。
「フツ、誰もいないな。これなら騒がれてもなんの問題もない。」

しかし耳のいい俺はその言葉が聞こえていた。俺はあいつが俺に、これからどんなことをされるのが不安で仕方がなかった。

「おいワタル！？お前ホントに何する気だ！お前がBL趣味なのは分かったからやめろ！」

それを聞いたワタルは、きょとんとした顔で俺のを見た。

「ハア？何言つてんの？俺はただユーキにこの世界の説明をしようとしただけだぞ？変な勘違いすんじゃないよ。」

俺は拍子抜けした顔で数秒すこし、そのあと恥ずかしくなり顔が赤くなった。

「ああああ！わかってたさあ！ほら、早く話をしなさいよ！」

「こいつむかつくなあ。まあいいや、さて。この世界は簡単に言う
パラレルワールドと平行世界だ。」

俺はパラレルワールドぐらいは知っているので、そのまま放置してワタルに話させた。

「この世界について三点程度でまとめるとだな、一つはまず敵がいる。俺はエネミーと呼んでいるが、いわゆるドラ○エで言うス○イムの立ち位置だ。弱いやつもいれば、一人じゃ倒せないぐらい強いやつもいる。」

「おいおい！そんななんどう戦うんだよ！武器も防具も何もないぞ！」
俺はかなり焦ったが、ワタルはなにくわぬ顔で続けた。

「まあ聞けつて。そこで二つ目、ここにいる人間はみんな異能力を持っているんだ。」

「嘘だろ！？俺はそんな能力ないぞ？」

「それはこの世界にいるときしか使えない。自覚症状はないから、ユーキのは後々調べていこう。俺の能力は説明が終わったら見せる

よ。」

俺は少々不満を感じながら、話を聞き続けた。

「そして最後だ。その異能力だが、効果は生まれもってから変わらないが強弱はある。強くするにはだな……………」

俺は息をのみ、じつと聞く。

「重度の厨二病になることだ。」

「おし、俺はすべてが解決したから帰らせてもらっわ。」

すごいスピードでその場を立ち去ろうとしたが、ワタルに腕をつかまれてしまった。

「まあ待て。俺はゲーム感覚で楽しませてもらってるから、お前も少々楽しめや。」

「ふざけるな。俺はまともな高校生活を過ごすんだ。厨二病になつてたまるか。」

俺は必死に抗議した。しかしワタルはなぜか勝ち誇った顔をして、俺の顔を見てこう言った。

「普通の高校生は、disasterなんて単語は知らん。お前はもう立派な患者だよ。だいたいこの世界の入口は厨二病じゃないと見えないしなあww」

俺は膝について倒れた。俺の頭の中にモ○ハンのクエスト失敗のBGMが流れる。

「まあとりあえず、ザコのエネミーでも倒してみるか。」
ワタルは俺の手をひっぱって歩き始めた。

気が付いたとき、俺の目の前にはチワワサイズの小さな動く箱みたいなものがあつた。

「……あ？ああ！？なんだよこれは！気持ち悪いな、箱に小さな足みてえな箱が四つ付いてんぞ！？」

「状況説明乙。まあこいつはスラム程度だから簡単に倒せるよ。ただし威力は高いしあたると痛いから気いつけるよww」

「笑うな！ってうおお！」

俺の横すれすれを噛みついてきた箱を、間一髪かわす。一丁前に牙もありやがる。

「おいどうしたユーキ。早く倒せよww」

「俺まえから思ってたけど言うわ。お前性格悪いな！つーかお前教えるとか言ってたけどまだ見てないぞ、お前の能力！」

「ああ忘れてた。いいよ、今見せる。」

そういったとたん、ワタルが俺の目の前で消えた。そのあと俺を襲っていた箱が突然横に吹き飛び、消滅した。

「ほら、これが俺の能力だ。」

いつのまにか俺の横にいたワタルがいった。

「うわっ！いつの間に！・・・ごめん。今何が起こったか、皆目見当つかないわ。」

「なんだよ鈍いなあ。俺の能力は自分の姿を消すんだよ。もちろん時間制限はあるけどな。」

「強いなあお前の能力。名前とかはあるのか？」

こんな質問をしたのは、完全に失敗だった。

「よくぞ聞いてくれた親友！俺の能力名は“^{イコールゼロ}0”だ！」

「ちよつと待ったあああああ！！！」

俺は相当大的な声でツツコミをいれた。

「それはまずいだろ！アラ○ネのコマンドじゃん！236Bじゃん！ダメだろ！」

「大丈夫だ、問題ない。あれは“イコール0”だ。どうにかなる。」
それから30分話し合ったが、ついに名前が変わることはなかった。

親友の説明と俺のザコ狩り（後書き）

一話書くのに二時間。

．．．．．すごい疲れます。

後で見直しましたが、別にユーキはなんも狩ってない．．．。

ルームと俺の能力（前書き）

今回は短めです

ルームと俺の能力

ワタルは一段落ついたこの状況で話を続けた。

「じゃあ、俺の能力名はいいとしてだな……。他にも細かいことを説明しなければなんねえから、ちつと俺についてこい。」

話す気力も尽きた俺は黙ってついていくことにした。

ワタルが向かった先は、俺達の通っている学校だった。こんなところは一日一回くるだけでいいんだよ。何回も来るとこじゃあねえよ。「おいワタル、なんでガッコーなんかに来てんだよ。俺帰っていいか？」

「学校見るたんびにそれいうのやめろ……。まあいい、この世界の学校は特別でなあ。なかに入ってから説明するよ。」

なかに入ると確かに違った。人もいたし、教室の一つ一つもなにかいつもとは感覚が違った。

ワタルがいつもの俺達の教室に入ると黒板にでけえモニターがあった。

「ここでは強さをはかるためにランクというものがある。そのランクを上げるには複数の課題をクリアしないとイケない。そこでユーキの能力がなんなのか探るために、一つの課題を利用させてもらう。」

「唐突すぎてなに言ってるかわかんねえけど、おいおい理解してくよ。ちなみに最高ランクとワタルのランクを教えてください。」

「最高ランクは9らしい。9になると最後の課題を受けることができ、クリアすると『この世界のすべての知識』を手にするらしい。未だクリアしたものはいないそうさ。ついでに俺のランクは3だ。」

ふーん……。俺は最後の課題がどんなものかを知りたくなった。

「さて、そろそろ始めるか。課題、“対人戦”。おいユーキ！このモニターの手形に手を合わせろ！」

俺は言われるがままに、手を合わせた。その途端に、視界が歪ん

「やっとわかったな、ユーキの能力。能力名はどうする？ユーキが決める。」

俺は素直に思ったことを能力名にすることにした。

「……………」
「ディストラクション破壊」だ。」

ルームと俺の能力（後書き）

自分でも書いて

「展開はやっ！」

と思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1847w/>

厨二病大戦

2011年9月8日03時20分発行